

TOSHIRO HATA PRESENTS

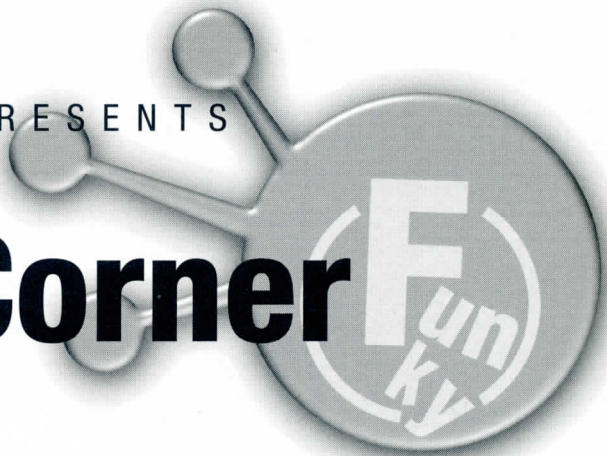
波多利朗の

# Funky Corner

文●波多 利朗 text by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>

(E-Mail) [catty@mxp.mesh.ne.jp](mailto:catty@mxp.mesh.ne.jp)



## 物故端末供養の巻

今回のFunky Cornerは、ちょっと趣向を変えてみることにしよう。

本コーナーは、ATARI Portfolioからスタートし、主にDOSベースの携帯端末の歴史を辿ってみようという企画である。

しかし、当然のことではあるが、1989年発売のPortfolio以前にも、BASICベースのハンドヘルドコンピュータやポケットコンピュータ、小型ワープロや電子手帳等が多数発売されてきた。またDOSベースのマシンであっても余りに氏素性が不明なものや、有名メーカが発売したものの全然売れずに消えて行った製品も多い。こうしたマシンは単体では紹介記事になりにくいですが、かといってそのまま葬ってしまうのは誠にカワイソウである。そこで今回は、物故端末供養と称して、筆者宅にある名も無き端末、忘れ去られたコンピュータを紹介し、ねんごろでもないけどそれなりに葬ってやろうと考えたワケだ。よって、今回は本記事全体が前フリ色物記事みたいなものなので、前フリは無い。

今回ご紹介するマシンは、どれも筆者の思い入れで選定した。読者の中には、ここにご紹介したマシンなぞ足元にも及ばないほど、レアでディープな製品をコレクションしている方もおられるだろう。そういった方は、是非Mobile Press編集部「物故端末供養祭係」まで連絡して頂きたい、っていうのは冗談だけだね……^o^ ;

さて、前置きはこれくらいにして、唐突に物故端末た

ちを紹介して行こう。なお、今回の企画が好評ならば、いつの日か第二回物故端末供養祭を行おうと思っていたりする。

### 鼻血が出るほどの謎ば〜機 SUPER MINI POCKET PERSONAL COMPUTER

トップにご紹介する端末は、それはもう鼻血が出るほど無名でマイナー、いったいどこの馬の骨だかわからな



台湾製謎ば〜機の外観写真  
鼻血が出るほどの謎ば〜機、SUPER MINI POCKET PERSONAL COMPUTERの外観。King of 謎ば〜の名にふさわしく、詳細が一切不明である台湾製CGAバムトップマシンだ！



### 002 キーボード部分のアップ

タッチタイピング可能な79キー・キーボードは、どこことなくTidalwaveの製品を彷彿とさせる



### 003 FDDユニットの外観写真

本体に付属してくる専用のFDDユニット。本体とほぼ同じ大きさというとてもいいデカさだ！

い台湾製の「謎ば〜機」である (001)。

LCDパネルの横には「SUPER MINI POCKET PERSONAL COMPUTER」という記載があるが、本当の名前は不明である。いかに「謎ば〜機」といっても、本体底面にシリアル番号かなんかが書かれたシールくらいは貼られているものだが、この製品にはそういった表示が全く無い。これじゃまるで台車ナンバーを削り取られた盗難車だよ、全く……。

唯一底面にMade in TAIWAN R.O.Cとの刻印があるため、この製品が台湾で作られたものであることだけは、かろうじて判別できる、って書いたところで、こんな怪しげなバームトップは台湾製以外には考えられないから、改めて言う必要も無いな……。

マシンの大きさは、謎ば〜機の名作であるME-386や前回ご紹介したPS-1000とほぼ同等であり、タッチタイピング可能な79キーのキーボードを搭載している。キータッチは多少引っかかるような感じを受け、若干押しづらい。このあたり、古の謎ば〜機ヲタクならきっとTaidalwaveの製品を連想するであろう (連想された方は、十分に廃人なので、よく自覚するように！) (002)。

本マシンに搭載されているCPUは80C88で、クロック周波数はFast (7.16MHz) とSlow (4.77MHz) の2段階に切り替え可能だ。PCMCIAスロットはType Iが1基実装されている。このマシンの特徴は、標準のシリパラコネクタが搭載されていることであろう。変換ケーブルを使用しなくても良い点は評価できる。

バッテリーは、メインに単三乾電池を4本直列に使用し、サブにCR2025を使用する。80C88のくせに単三を4本も使用するとは、ずいぶんとお飯食いのマシンだ。し

かもこのバッテリー、入れたが最後、取り出す時に一番奥のバッテリーを引っ張り出すのが一苦勞するというおまけ付きだ。

このマシン、本体とほぼ同じ大きさという、とてつもなくでかい付属FDDユニットといい、本体内蔵のOSが、Digital ResearchのDR DOS Ver6.0であることといい、怪しさにはこと欠かない一台である (003)。

以下に、本マシンのスペックを示しておく。



モデル名称	SUPER MINI POCKET PERSONAL COMPUTER
メーカー	不明 (台湾製)
製造年	不明 (1992年頃?)
CPU	80C88 (?) (7.16/4.77MHz)
搭載メモリ容量	ROM: 不明、RAM: 640Kバイト
ディスプレイ	白黒液晶640×200dot CGA アクティブエリア: 147mm×60mm
キーボード	QWERTY 79キー・キーボード
I/Oポート	シリアルポート (標準コネクタ使用) ×1 パラレルポート (標準コネクタ使用) ×1 外付けFDD接続ポート (専用仕様コネクタ)
バッテリー	メインバッテリー 単三乾電池×4本 サブバッテリー リチウムボタン電池 (CR-2025) ×1個
PCMCIA	PCMCIA Type I 1スロット実装
大きさ	236 (W) ×115 (D) ×30 (H) mm
重量	??
OS	Digital Research, Inc. DR DOS Ver 6.0
内蔵ソフトウェア	Personal Assistants Ver 1.11
付属品	シリアルケーブル1本、FDDケーブル1本 外付けFDDドライブ ACアダプタ2個 (本体用とFDD用) 5V仕様



## 🔌 レアモノとして人気の高い、 悲劇の携帯端末

### PC-98HA (HANDY98)

NECが1990年に発売した、A5ファイルサイズの携帯端末である。大手メーカの製品であるにもかかわらず、マイナーなマシンであった(004)。

ところで、1989年に発売された記念すべきノートパソコンの第一弾、PC-9801N(98ノート)は余りにも有名だ。98ノートは手軽に持ち運びができ、価格も手頃であったということもあってヒット商品となった。HANDY98は、この98ノートの携帯性をさらに重視して企画されたマシンだった。ところが……である。CPUにV50(μPD70216:10MHz)を採用し、液晶画面表示が白黒2階調表示のみであったことから、従来のPC98シリーズとの互換性が低くなってしまい、市場ではほとんど受け入れられなかったという暗い過去を持つに至る。思えばかわいそうなマシンだな……。

因みにCPUにV50を採用した最初のPC98シリーズは、1986年に発売されたラップトップパソコン、PC98LT Model I だと言われている。そのため、このHANDY98は「LT互換機」などとも呼ばれていた。

HANDYという名称が付いてはいるものの本体重量は約1.1kgあり、手に持った感じはズシリと重い。それでも、当時としてはMS-DOSが走る端末としては非常に小さい製品ではあった。筆者も発売当時非常に興味を引かれたが、いかんせん19万8,000円という価格は高すぎた……。



004  
HANDY98の外觀写真  
NECが発売した携帯パソコン、HANDY98の外觀写真。今となっては結構なレア物になってしまった

本体内部には、640Kバイトのメインメモリと1.25MバイトのRAMドライブを内蔵していた。OSはMS-DOS Ver.3.1がROMで搭載され、HANDY98メニューというシェルがcaぶされている。付属ソフトは、MS-WORKSがPCカードで供給されていた。なお、PCカードは一応JEIDA Ver.4準拠のカードスロットが1基搭載されている(005)。

メインバッテリーは本体内部にNi-Cd蓄電池を内蔵しており、連続使用で約7時間駆動できたそう。キーボードはボタンのタイプで、お世辞にも押しやすいとは言えない。見た感じでは、どことなくInstantTech製造の謎ば〜機、PTP-20の雰囲気を感じさせる(なお、ここでPTP-20のキーボードを思い浮かべた方は、またしても十分に廃人なので、よく自覚するように!)。なおこのマシン、当時としては珍しく本体の色をブラック/ホワイト/レッドの3種類から選ぶことができるというオシャレな一面



005  
HANDY98のPCMCIAカードドライブのアップ  
HANDY98のPCカードドライブのアップ。アプリケーションソフトであるMS-WORKSは、PCカードで供給される



006  
HANDY98のキーボード部分のアップ  
どことなくInstantTechのバームトッ、PTP-20を彷彿とさせるHANDY98のキーボード。お世辞にも押しやすいとは言えない。いや、どちらかというと押しにくい



も持ち合わせていた (006)。

電源を投入すると、HANDY98メニューが表示される。F10でメニューを抜けると、PC98ユーザではお馴染みの、懐かしいMS-DOSメニューが現れる。標準状態では、約970KバイトのCドライブには、MS-DOSの基本コマンドが格納されており、1.25MバイトのDドライブはFDとしても使えるRAMドライブとなっている (007)。

本マシン、市場に出た台数が少ないこともありレア度が高く、現在ではコレクターズアイテムになっているようだ。オークションでも人気商品であり、程度の良いモノ



**HANDY98の液晶画面のアップ**  
HANDY98メニューというシェルが動作するメイン画面。640×400ドットで白黒2階調の液晶である

はかなりの高額が付くこともある。筆者も実は最近になってYahoo!のオークションで新品同様の2台目を、永久保存用として入手した (2台も持つなよな > 俺) ^o^ ;。以下にHandy98のスペックを示す。

モデル名称	PC-98HA (HANDY98)
メーカー	NEC
製造年	1990年
CPU	V50 (μPD70216: 10MHz)
搭載メモリ容量	ROM: 不明、RAM: ユーザメモリ 640Kバイト スケジューラメモリ 160Kバイト RAMドライブ 1.25Mバイト
ディスプレイ	反射型モノクロ液晶640×400dot (2階調表示、1画面)、アクティブエリア: 146mm×91mm
キーボード	QWERTY 79キー・キーボード
I/Oポート	セントロニクス・パラレルポート×1 RS232Cシリアルポート×1 拡張バスロット (ドッキングステーション接続用)
バッテリー	メインバッテリー 内蔵型Ni-Cdバッテリー サブバッテリー リチウムボタン電池 (CR-2032) ×1個
カードスロット	JEIDA Ver.4準拠1スロット実装
大きさ	234 (W) ×148 (D) ×36 (H) mm
重量	1.1kg
OS	MS-DOS Ver3.1 ROM Version N88日本語BASIC
内蔵ソフトウェア	MS-WORKS、HANDY98メニュー
発売当時価格	19万8,000円
付属品	ACアダプタ

## デュアルCPU構成! 拡張性の高い携帯パソコン EPSON HC-40

これも今となっては結構なレア物。EPSONが1984年頃に発売した8ビットパソコンである。筆者はこのマシンを、Yahoo!のオークションで、元箱・保証書・梱包材等すべて揃ったデッドストック状態で入手した。さすがにデッドストックと称するだけのことはあり、外箱には保証書や販売店向けのPOSシール (!) まで添付されているというコンディション。まるで現行製品のような保存状態だった (008)。

HC-40が発売された当時、筆者はこれが欲しくて欲しくてたまらなかったが、価格が余りにも高すぎたため、断念せざるを得なかった記憶がある。本体はA4サイズでコンパクトにまとまっはいるが、キーボードの作りは現状



**HC-40の商品構成**  
デッドストックで入手したHC-40。元箱、取扱、保証書付きの完全保存版。箱の中には、ユーザ登録書や乾電池 (発売当時のもの!) まで入っていた。ほぼ、使われていないに等しい逸品



のノートパソコンよりもしっかりと作られている。キークリック感はないが、デスクトップマシンと同様に十分なストロークが確保されており、使いやすい。配置はQWERTYで、Aキーの隣りにCTRLキーがある、いわゆるXT互換タイプのものだ。キートップは、アルファベットがこげ茶色、SHIFTやスペースキーがグレー、カーソルキーが黄色でリターンキーが赤と、カラフルな色が付いているのが特徴だ (009)。

液晶画面は240×64ドットと、現在の水準からすれば「なにコレ？」って言うくらい小さいが、見やすいように液晶画面がチルトできたりするところは、なかなか芸が細かい (010)。

さて、このパソコンの取扱説明書を見ると、デュアルCPU構成であることが記載されている。デュアルCPUとは言っても、スレーブ側CPUの機能は、電源管理とキーボード制御程度のものであったが。

メインCPUは、その昔マイコン少年だった方なら知らない人は無いZ80 (3.68MHz)、スレーブCPUは、NECの4ビットシングルチップマイコンである7508 (270KHz) である (スレーブCPUのクロック周波数がカワイイ！)。

いやあしかし、スレーブCPUに7508を使うとは、懐かしいねえ！ 7508といえば、ROMを4Kバイト、RAMを224×4ビット内蔵し、8ビットシリアルインターフェースと8ビットタイマ/イベントカウンタ、時計用クリスタル発信器と32本の入出力ポートを、40ピンプラスチックDIPもしくは52ピンプラスチックQFPに詰め込んだマイコンで、主に家電製品やオーディオ製品の制御用として使われていたものだ。



HC-40の外観写真  
カラフルなキーボードが特徴的なHC-40。特にキーボードの出来は良く、結構押しやすい

……ってなんでこんなに7508にこだわる？ > 自分。過去に7508に関係してたのか？ > 自分。 ^o^ ; ;  
ということは置いていて…… (話しがそれてスマセン ^ ^ ; ;)。

このHC-40であるが、本体右上にカートリッジ形式のインターフェースを搭載しているのが特徴であった。ここに別売りオプションであるRAM・ROMカートリッジ、マイクロカセット、計測ユニット、カートリッジプリンタ等のオプションを、超合金合体ロボよろしく装着して使用することができたのだ。また、HC-40本体にはプリンタやオーディオカセット、FDユニットインターフェースの他にも、標準でバーコードリーダーインターフェースも搭載されており、現場でのデータ収集を考慮した設計となっていた。当時としてはかなり拡張性があるモデルで



HC-40の液晶画面のアップ  
OSとしてCP/M Ver 2.2拡張版が動作し、Microsoft BASICが走るHC-40。ただし、液晶画面は狭い



本体裏面に実装された各種インターフェースコネクタ  
拡張性の高いマシンらしく、本体には各種インターフェースコネクタが実装されている



あったと言えるであろう (011)。

さて、HC-40を起動させると、懐かしの物故OSであるCP/M Ver2.2 (拡張版) が立ち上がる。CP/MはDigital Researchが発売した8ビットマイクロコンピュータ用のFDOS (Floppy Disk Operating System) で、Control Program for Microprocessorの頭文字を取ったものだ。LCD上には、現在利用可能なプログラムのリスト一覧が表示されるので、実行したいプログラムにカーソルを合わせてリターンキーを押せば良い。本体内蔵のBASICを走らせたい場合には、BASIC.COMにカーソルを合わせてリターンキーを押す。すると、

**BASIC Ver 1.0 (C) 1983 Microsoft & EPSON**

と表示され、Microsoft BASICが起動する。

以下にHC-40のスペックを示す。

モデル名称	HC-40
メーカー	EPSON
製造年	1984年
CPU	マスタCPU : Z80 コンパチブル (3.68MHz) スレーブCPU : 7508 (270KHz)
搭載メモリ容量	ROM : 32Kバイト (ROMカプセルとして最大64Kバイトまで拡張可能)、RAM : 64Kバイト
ディスプレイ	反射型モノクロ液晶 グラフィックモード 240×64dot キャラクタモード 40桁×8行 アクティブエリア : 131mm×35mm
キーボード	QWERTY 58キー・キーボード
I/Oポート	プリンターインターフェース (セントロニクス準拠) ×1 シリアルインターフェース (RS232C準拠) ×2 外部オーディオカセットインターフェース パソコンドリー-ダイインターフェース システムバスコネクタ
バッテリー	メインバッテリー : 単三電池×4本 サブバッテリー : 内蔵Ni-Cd電池
カードスロット	無し
ROMカプセル	2スロット搭載 (最大容量32Kバイト/スロット)
大きさ	296 (W) ×216 (D) ×37 (H) mm
重量	1.6kg (乾電池を含む)
OS	CP/M Ver 2.2拡張版
内蔵ソフトウェア	Microsoft Basic Ver 1.0
発売当時価格	-

## レアモノ中のレアモノ ATARI Portfolioのプロトタイプ

どのような製品にも必ずプロトタイプというものが存在する。当然、これらは世に出ることは無く、当初の目的が終われば廃棄されるか、さもなくば開発者の記念品として保存されるのが関の山だ。

ところが、生まれながらの廃人であり、物理層プログラマーでもあり、地獄のロシアカメラコレクターでもあり、ATARI Portfolioに対しては博士の異常な愛情とも思える執着を示し、揚句の果てに一体誰が使うのか想像することさえ困難なPortfolio専用の日本語エディタを作ってしまったというMadame Fatale氏 (前置き長すぎ!) が、インターネット上のショップで「1台限り」の触れ込みで、ATARI Portfolioのプロトタイプを販売しているところを発見、当然のことながらさっそく購入したのである。ちなみに購入先のショップのURLは、下記の通り。もっとも、1台ばっきりの販売なので、当然だが今となっては購入することができないけどね (012)。

<http://www.myatari.com/>

さて、このプロトタイプのPortfolioであるが、その外見からして、いかにもプロトタイプ然としている。外装はテカテカの黒いプラスチック剥き出しで、製品版に見られるコーティング等は一切無い。ヒンジの加工精度も悪く、蓋の開閉も若干きしみがある。細部の造形も荒く、液晶へのフラットケーブルなどは剥き出しのままだ。



ATARI Portfolio プロトタイプの外観写真  
テカテカに光るプラスチックのケースが雲田気満点の、ATARI Portfolio プロトタイプの外観



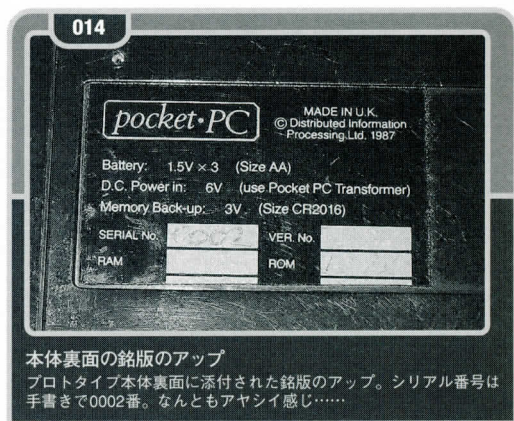


**製品版とプロトタイプと比較**  
 プロトタイプは、液晶周りのデザインが製品版と異なっている。また、液晶品質も、製品版と異なる。右がプロトタイプ、左が製品版

本体の大きさと基本的なデザインは、製品版とほぼ同じだ。ただし、液晶周りのデザインが製品版と異なっている。液晶は緑がかかった色合いのもので、製品版のグレーでは無い。搭載されているROMのバージョンは、2.11 v1.030となっていた。製品版では2.11 v1.072となっているので、プロトタイプの後マイナーバージョンアップを何回か繰り返していたことがわかる (013)。

さて、興味深いのは、本体底面に添付された銘版の表記だ。製品版ではMade in Japanとなっているが、プロトタイプではU.K.となっている。また、Portfolioという名称は一切記載されておらず、pocket-PCといった記述が現受けられる。当初予定されていた名称は、どうやらpocket-PCだったようだ。もしこのまま発売されていたとしたら、随分平凡な製品名称になってしまっていたところだ。

入手したプロトタイプの製造は1987年。製品版が登場したのが1989年であるから、発売2年前のものであることがわかる。シリアル番号は0002で、2台目の製品みだ。ちなみに、シリアル番号は手書きであった。細かいことだが、銘版には「Memory Back-up 3V CR2016」といった記述がある。製品版Portfolioには、メモリバックアップ用のボタン電池は搭載されておらずこのプロトタイプ



**本体裏面の銘版のアップ**  
 プロトタイプ本体裏面に添付された銘版のアップ。シリアル番号は手書きで0002番。なんともアヤシイ感じ……

タイプも同様であるが、どうやら当初はバックアップ電池を用いることを考えていたようだ (014)。

プロトタイプとはいえ、全体的には極めて製品版に近い仕様と言え、かなり完成度が高かったことが伺われる。さすがに一世を風靡した携帯端末だけのことはあるな……

参考までに、製品版ATARI Portfolioの仕様を示しておく。

モデル名称	ATARI Portfolio
メーカー	ATARI
CPU	80C88A
搭載メモリ容量	ROM : 256Kバイト、RAM : 128Kバイト
ディスプレイ	40キャラクタ×8行表示 アクティブエリア : 114mm×30mm
キーボード	QWERTY 63キー・キーボード (ボタンタイプ)
I/Oポート	Portfolio Bus実装 (オプションのシリアル及びパラレルケーブルを接続する)
カードスロット	Memory Card Slot 1基実装 (独自仕様)
バッテリー	メインバッテリー 単三乾電池×3本
大きさ	200 (W) ×105 (D) ×29 (H) mm
重量	525g (乾電池を含む)
OS	DIP Operating System 2.11
内蔵ソフトウェア	Address Book、Calculator、Diary、Editor、Setup、Worksheet
ACアダプタ	別売り
発売当時の価格	\$300

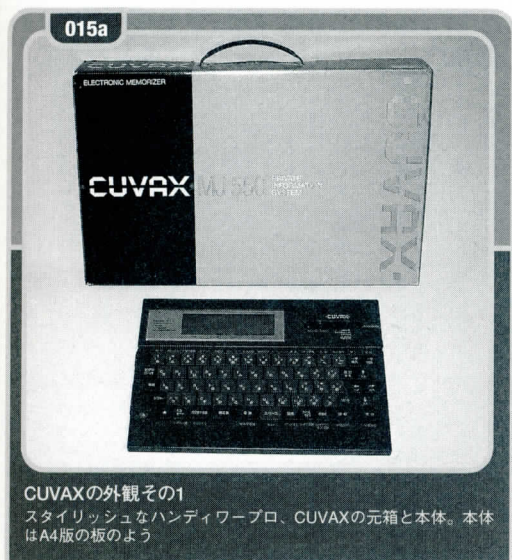
## 減多に見ることが無い ワープロ専用機 CUVAX (MJ-550)

パソコンが今ほど普及していなかった時代には、多くのワープロ専用機が発売されていた。今回最後にご紹介するマシンは、こうしたワープロ専用機の中でも異色の

存在であった、リコーのCUVAX (型番MJ-550) というマシンである (015a)。

ところで、このCUVAXというマシン、今となってはどうやら世の中から完全に忘れ去られてしまった製品のようだ。試しに、国内の主だった検索エンジンで、「CUVAX」という文字列を入力してみた。寂しいことに、一件も引っかかってこない。世の中結構スキモノが多いから、いかにレアマシンといえども、一人くらい





**015a**  
CUVAXの外観その1  
スタイリッシュなハンディワープロ、CUVAXの外箱と本体。本体はA4版の板のよう

はHPに掲載してるものなのにねえ。

さて、CUVAXはリコーが1987年に発売した、極めてスリムでスタイリッシュなハンディワープロであった。その最大の特徴は、何と言っても外形のデザインにある。本体の厚さを徹底的に薄くしたので、外見はまるでA4サイズの板のようなのだ。本体の厚さは、キートップを含まない場合でたったの12.5mm、キートップを含んでも15mmしかない。当時の技術でここまで薄く作れたのは驚異的ですからある。しかも、ただ薄いだけでは無く、タッチタイピング可能な16mmピッチのQWERTYキーボードと充電電池まで本体に内蔵し、重量も950gと1kgを切っていた。外箱に「ELECTRONIC MEMORIZER」と書かれていることから、本製品のコンセプトが、どこまで

も簡単に持ち運んでメモを取ることができる、電子メモ帳であったことが伺われる (015b)。

このワープロ、記憶によるとCPUに8086を使用していたと思う。動作クロックは不明。ワープロ専用機ということもあり、機能キーの配置は若干特殊となっている。例えば、通常のパソコンでは、リターンキーを押すところを、右下に配置されている実行キーを押すといった具合である。キーボードはストロークが若干浅いものの軽いクリック感があり、タッチタイピングも容易である (016)。

液晶画面は256×64ドット。現在の標準からすればお話しにならないほど狭い画面であるが、発売された時代を考えれば致し方ないであろう。上述したように、メイン電源には本体に内蔵された充電電池を使用し、付属のACアダプタで充電を行う。本体に内蔵メモリの内容は、サブ電池であるCR2016がバックアップする。ICメモ리카ードスロットを1基搭載するが仕様は特殊であり、PCMCIAカードは使えない。なお、別売りのICメモ리카ードには、16Kバイトメモリ、32Kバイトメモリ、JIS第二水準、ゴシック体フォント、データ処理(表計算プログラム)、英文スペルチェックが用意されていた。ICカードは、本体右上のカバーを開いて挿入する。一見Type Iに似た形状であるが、コネクタ配列は1列のみとなっている (017) (018)。

本体左側面には、ACアダプタコネクタ、プリンタコネクタ、拡張ケーブル接続端子、液晶濃度調整ダイヤルが並ぶ。プリンタコネクタは、基板上に実装したヘッダピンをそのままコネクタとして使用しており、この点についてはデザイン優先の製品としては、若干無骨な印象を与えている。

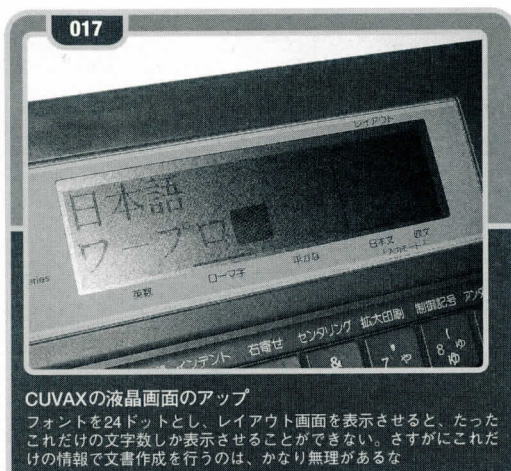


**015b**  
CUVAXの外観その2  
スタイリッシュなハンディワープロ、CUVAXの側面本体の厚さはわずか12.5mmと極めて薄い



**016**  
CUVAXのキーボードのアップ  
16mmピッチを持つCUVAXのキーボード。ワープロ専用機らしく、機能キーの配列がやや特殊である





017 CUVAXの液晶画面のアップ

フォントを24ドットとし、レイアウト画面を表示させると、たったこれだけの文字数しか表示させることができない。さすがにこれだけの情報で文書作成を行うのは、かなり無理があるな



018 ICカードスロットのアップ

ICカードは、本体右上のカバーを開いて挿入する。なお、カードの仕様は特殊

CUVAXにはオプションで純正の専用プリンタ (TP10A) も用意されていたのだが、本体の洗練されたデザインと比べると、プリンタのほうは当たり前格好で、なんだか気が抜けてしまう。プリンタの仕様は、ごく一般的なインクリボンタイプのものであった。

電源を投入すると、初期メニューが表示される。初期メニューは「文書作成」「スケジュール」「補助」の3つから成り、これが本ワープロの全ての機能となっている。「文書作成」を選択して実行キーを押すと、書式設定画面を経て、作成画面に入る。ワープロ機能としては、狭い液晶画面を有効に使うように、工夫が凝らされている。基本的に表示画面モードには標準と拡大の2つがあり、それぞれレイアウト表示付きと無しが設定できる。各モードでの表示文字数は、下記の通り。

標準表示 レイアウト付き 12ドットフォント	13字×4行
標準表示 レイアウト無し 12ドットフォント	18字×4行
拡大表示 レイアウト付き 24ドットフォント	7字×2行
拡大表示 レイアウト無し 24ドットフォント	10字×2行

液晶画面が狭いために、表示できる文字数は圧倒的に少ない。そのため文章全体のレイアウト表示機能は必須であった。しかし、24ドットフォントを使用すると、1行たったの7文字しか表示されないというのも、スゴイ話ではあるな。なお、処理スピードは、この時代のマシンとしてはまずまずのレベルであり、特に支障はない。

このCUVAXは、一般のワープロ・パソコンのように秋葉原の量販店経由で販売されず、デパート等の異なった販売経路で販売された記憶がある。購入当時のレシー

トを見ると、筆者はナント！伊勢丹デパートの文房具売場で購入していた。ちなみに、当時の本体価格は4万円、32KバイトのRAMカードは8,000円、表計算プログラムが格納されたデータ処理カードが6,000円であった。RAMカードの容量に、時代を感じるができる。

以下にCUVAX (MJ-550) のスペックを示す。

モデル名称	CUVAX (MJ-550)
メーカー	リコー
製造年	1987年
CPU	確か8086だったと思う (? MHz)
搭載メモリ容量	ROM : 不明、RAM : 不明
ディスプレイ	白黒液晶256×64dot アクティブエリア : 110mm×28mm
キーボード	QWERTY 70キー・キーボード
I/Oポート	プリンタポート (特殊仕様) 拡張ケーブル接続端子 (特殊仕様)
バッテリー	メインバッテリー : 本体内蔵の充電池 サブバッテリー : リチウムボタン電池 (CR-2016) ×1個
カードスロット	ICカードスロット1基搭載 (特殊仕様)
大きさ	297 (W) ×210 (D) ×12.5 (H) mm
重量	??
OS	専用OS
内蔵ソフトウェア	ワープロ、スケジューラ、電卓
付属品	ACアダプタ、専用プリンタケーブル

さて、物故端末供養祭として、以上5機種をご紹介してみた。若干ではあるが、筆者宅にはまだ供養しきれていないものもあるので、そのうち機会を見つけてご紹介しようと思っている。